
とある男の不幸な事故

大嘘憑き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男の不幸な事故

【Nコード】

N1359Z

【作者名】

大嘘憑き

【あらすじ】

アニメ●トに行く途中だった主人公。しかし、いきなりの腹痛に倒れ、死んでしまったら訳の分からないところにいた。その時であった神にリリカルなのはの世界へ送られた。「いやっほー!!」と意気込んだのはいいものの、他に転生者はいるわ、能力は欠陥品んだわ、もう散々だ。しかも、訳の分からん喋る宝石まで現れて!どうなる俺の人生!

この小説はキャラ崩壊などが激しいため、苦手な方はバックして下さい。

※この小説は不定期です。完結するかわかりません。

プロローグ（前書き）

お久しぶりです。大嘘憑きです。
今回は続くかわからないけど頑張ります。
ではどうぞ!!

プロローグ

ありきたりないいつもの光景。中学ぐらいの男子がなぜか発育のいい空見町の女子の胸を見て興奮している。

そこには羽の生えた女の子がいてその周りはいつものにぎやか。そんな光景が続いていた。

俺は高校2年だが、そんな俺からしてみても微笑ましい光景だと思う。

俺は今日、アニ●イトにいくため電車に乗った直後だった。

「いたっ！」

いきなりの腹痛。そのまま俺はその痛みに苦しみながら意識がブラックアウトした。

思えば今日食べた賞味期限3年過ぎのチーズがいけなかったかもしれない。そんなことはないと思っていたがあったようだ。思いゆく中で俺はそつと意識を手放した

———起きろ———

声が聞こえてくる

———起きろ！———

まただ。今度ははつきりとした

「はっ！」

俺はその声に跳び起きた。

『お主。アレを食べて死んだのはお主か?』

「あれって……あのチーズですか?」

『そうだ。やはりお主だったか……』

「死んだって……おれやはり駄目だったのか。残念だ」

『お主がアレを処分してくれたのか……ならわしがお主を生き返らせてやろう』

「え?」

『能力を一つだけやろう。さあ言うが良い。』

俺は言われるまま能力を適当に言う。それは俺が持っていたユウ・クリウッド・ヘルサイズのカードを見たときだった。

「じゃ。このカードのキャラが使っている能力で……」

『わかった。では次に世界選択だ。お主にはある世界に行ってもらおう。』

「ある世界?」

『いけばわかる。ではな』

そうして俺の第二の人生が始まった。

プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします

第一話 理不尽（前書き）

では、本編の方をどうぞ！

第一話 理不尽

結果からいいます。確かに転生はできました。親は何故かいなかったけど、そして俺はこの世界に来るとき決めたことがある。

「俺はハーレムを作る！！！」

そんな時期もありました。

しかし実際に能力を試しに使うと頭痛で2，3日休まないと行けなくなる。

って言うか……この能力……欠陥品じゃねえ？

そんなこんなで聖祥小学校に入学。実際に原作キャラに会ってきた。しかし既にそのキャラには彼氏的存在（転生者）がおり一度は勝負を仕掛けてみたところボロ負け。

まあ実際には変装した俺がなのはたちに喧嘩を吹っかけてだけど……

まあ相手の能力が俺が手に入れた能力よりもはるかに強いわけでした、瞬殺された。

そんなことにめげず俺はいつものように学校に登校したのだった。

「おはっよー！みんな 元気か！！！」

これがいつもの俺のキャラだ。しかし反応が帰って来ない。みんな俺のことうざいやらキモいやらの視線を送ってくる。

多分俺はいじめというものに遭っているのだろう。

それを確信付けたのは今朝のことだった。いつものように登校して下駄箱に靴を入れて上履きをはこうとする。はこうとした瞬間

痛みに襲われた。俺は直ぐに上履きを脱ぎ捨てると中には画鋏が大量に入っている。

幸いにもすぐに脱ぎすてたため痛くはなかったが、普通の人をよそおするため保健室へ直行。これは悪ふざけが過ぎるということで先生にちくった。先生も対処してくれようとしたが、犯人は捕まらず、何故か俺は浮いた存在となった。どうして？

多分これが行けなかったのだろうな。保健室に行った後平然と登校。いつもと変わらぬ挨拶。うん完全にいじめにきづいていない雰囲気だ。

ある日のことだ。またいつものように登校していると殺人鬼に襲われたり飲酒運転の人がひき逃げをしようとしていたり、学校に行くと花束が机に置かれていたり、廊下に出てたり、教科書がなくなったり、ありもない罪で万引き犯扱いされたりした。

それでも俺はあきらめない！！

そう俺は誓ったのだった。しかし事態を一転させた出来事があった。ある日の放課後。クラス合同体育のことだ。先生は少し職員室に行つて来るといいそこから出て行った。

「おい。直樹。なんでおまえまだ学校にいの？」

少しがたいの良い男子だ。

「は？何って？そんなこと言われる筋合いはないな」

すると他の人達からもいろいろと言われた。全て同学年だ。

「さっさと死ねばいいのに」

「あんたの顔なんか見たくないの」

「ほら帰れ帰れ！！ここはお前の居場所じゃねえ。いやこの世界にお前の居場所はねえよ」

今の言葉はまじイラつときたがそんなことに動揺する俺じゃねえ。平然とする

「俺の人生だ。お前らには関係ない話だろう。」

「関係あるんだよ。特にお前の顔が一番気に食わねえ」

なにこのいじめ？昔聞いたことがある言葉を行ってみよう。

「いじめかっこ悪いよ」

「はあ〜何言ってやがるてめえ」

そういつて殴りかかってきた。俺はその殴りをよけもせずに受けた。そしてよろっと立ち上がる。

「はあはあはあ。なぜ殴った。」

「はあ？殴られて当然だろう？お前が悪いんだから」

次に女子どもにボールを投げられた。しかも原作キャラまで混じっている。どうして？

しかもなぜかボールに混じって魔力弾が飛んでくる。……………

……普通当たったら死ぬレベルだぞ？俺はボールに当たり倒れなんとか魔力弾をよけた。

誰かが舌打ちするのが聞こえた。確信犯だなこいつ。

「痛てえ。はあはあはあ。」

それ以外発する言葉がなかった。そして一人がどけという合図を送った瞬間。俺に向かって一本の槍が飛んできた。それは正しく転生者が放った槍『ゲイボルク』確実に心臓を貫く技だ。俺は痛めている身体を無理やり起こし、それをよけた。だがやりは追ってくる。俺が

もうだめだ。と思ったときだった。

「お前ら！なにしてる！！」

いきなり教師が現れた。俺はそれから意識を手放した。

目が覚めると病院の一室だった

隣には俺を助けてくれた教師。男性。がいた。

「俺は助かったのか……………」

すると教師は俺に向かってこういった

「今回はお前が悪いのか？」

は？なにこいつ？この現場見て俺が悪いって？はは泣きたなるねえ

「あの場にいた奴らは全員お前が悪いって言ったがどうなんだ？」

「……………」

俺は無言で返す。はっきり言って返す言葉がなかった。俺が何と言

ったところで信用してくれるかわからない。しかも同学年全て敵だぞ！！！

「まあいい。落ち着いたら話してくれ。」

そう言って去っていった。

退院後

人目を避けて病院の近くの森を抜けるためそこを通った。ちなみに俺がいるのは現時点で小学4年生AS終了後だ。

「ああ。どっかに俺の人生を変えてくれるものが落ちてないかな」

そう言った瞬間頭痛に苛まれ、あたりが暗くなり意識を落とした。

第一話 理不尽（後書き）

直「さてさてやってきたぜ俺の時代!!」

作「何を言っているんだ？」

？「そうですね。まあ次からは私が活躍しますけど・・・」

直「お前の活躍なんてねえよ！」

？「そうなんですか？」

作「・・・さあ？」

直「おい！ちゃんと答えろよ！」

作「・・・」

？「・・・」

直「どうして二人とも無言!!」

作「さあて、無駄にハイテンションな馬鹿は置いて・・・」

直「・・・おい。今馬鹿って言わなかったか!？」

？「そうですね。じゃあさっさと終わりますか。」

直「お前にまで無視された!？」

作「では次回で！」

直「無視するんじゃないっ！！」

第2話 22個目のジェルシード? (前書き)

新キャラ登場!!

さてさてどうなる? 主人公の運命は!?

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
は？

「なあ聞きたいことがあるんだけど・・・・・・・・」

「なんですか？」

「お前ってジェルシードだよな？」

「そうですが？」

「ジェルシードって喋るの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・あっ」

いきなり喋らなくなった

「っってもう遅いからね！喋っているから・・・・・・・・それに俺の
願いは叶えられたのかな？」

「それはあの平凡がなんとか？っていう話ですか？無理です。自分
で叶えて下さい。」
まさかのリアルアドバイス！！宝石にここまで言われるとは思って
なかったよ！！！！

「それはそうとして・・・・・・・・」

話を流された！！！！

「あなたが私の主ですね？」

「は？なにをいっているんですか？」

「私の封印を解いてくれたのがあなたです。よってこれより彼方に従います。」

何故？しかもこれってロストログアだよね。これ所持してる時点で
おれ一種のロストログア不法保持者だよね。次元犯罪者
まっしぐらな人生じゃねえ？

「嫌だ。俺はもっとまともな人生を送りたいんだ！」

そういつてジェルシードを投げ飛ばす。そして家へ直行した。
家に帰ると絶句。なんと家が・・・・・・火災に合っていた。
そしてポケットに違和感があった。それはあのジェルだった。

『全く。いきなり投げ飛ばすなんてダメじゃないですか。』

これはおそらく念話だろう。頭に響いてくる。

『なんでお前がここに！！！！』

『それはですね。一度契約したものは死ぬまで私と一緒にですよ。』

ということは俺って結局犯罪者になるしかないのか？

『まあそういうことです』

心読まれた！！

理不尽だ。しかしなぜ家が燃やされているのだろうか？
その理由はすぐにジェルが教えてくれた

『それはですね。多分あの子たちにせいだと思います。』

見ると原作キャラが慌てている。なのは達だ。

『たぶん訓練中に偶然攻撃が当たったと思われます。どうします？』

『なあ理不尽なこと多くね？俺なにかした？』

『多分そういう運命なのでしょう。ご冥福をお祈りします。』

・・・・・・・・・・・・・・・・あの中には俺のだいじなものがいっぱい入っていたな。具体的に言うとなんか集めた色々な物達・・・・最悪だ。

俺はその場で泣きわめいた。あたかも普通を装って。

「誰だよ。こんなことした奴は・・・・・・・・あそこには俺の俺の両親の写真や遺品があるんだよ。返せよ。俺の家を返せ！！！！」

周りを気にせず絶叫。さすがに気の毒だと思ったのだろう。周りは俺を慰める言葉をかける。

そして消防車が到着したのは家が完全に燃え尽きた後だった。

「殺すころすコロス殺す。こんなことした奴全員殺す。コロシテヤル！！！！！！」

あたりを気にせず、逃走した。

多分原作キャラはここまでなるとは思ってたのだろう。これは一種の縛りだ。これから彼女たちは忘れることができないものとなるのだろう。

森に戻った俺は一応領主に許可をとり………ていうかこの森じたい俺の森だったので家を建て、そこで暮らすことにした。あの放火事件以来俺は学校に入っていない。

家にはゲームと、たたかえるようにジェルと練習する場所だけ。

空腹は頭痛を追ってまで空腹感がないことにした。

ゲームに没頭する毎日。それから俺とジェルが出会って1年が過ぎた。

どうやらジェルは人間にもなれるらしい。魔力を消費するけど……誕生日を祝ってやろうと思いき最近噂の翠屋。にいきこうと決意した。別に原作キャラがいまいが関係無い。

これが俺の人生だから。

そして気がつけば翠屋前

カランカラン

「いらっしゃいませ！」

現れたのは多分高校2年ぐらいだろうの歳の人。通称剣道女。

「誕生日を祝いたいです。ケーキをくれませんか？」

ほぼ実際は俺が食べるけど……一応あいつと出会って一年だ。お祝いぐらいしてやろう。

「少々お待ち下さい。」

そういつて俺は窓を眺めながら待つことにした。すると後ろからいきなり声をかけられた。

「大丈夫か？」

それは若い男だ。たぶんこのひとが月村の姉と付き合っているエロゲ主人公の恭也さんなのだろう。

「なにがですか？」

「いやなあ。君の雰囲気が普通の人とは全然違う意味で危ない思っただけだ。」

「そうですか……………」

俺は暗い雰囲気と言う。

「ちょっとついてきてくれないかな」

言われるがままにいついて行っった。

少しすると道場らしき建物に入った。

どうしてこんなところに連れて行くんだ？と思ったが気にせず見た

「どうしてこんなところにきたんですか？」

「どうしてだと思う？」

「わかりません。俺……………もうそろそろ帰らないといけな
いんで……………」

「ちょっと待て。話してくれないか・・・・・・・・どうして君がそうなったのか。」

話したところでどうなるんだ？と思ったが自然とどうなったのかが口に出てしまった。気付けば泣いていた。いつぶりだろう？最後に泣いたのは1年前の火災の時だ。

「すみません。取り乱してしまいました。・・・・・・・・・・
・ありがとうございます。」

お礼を言い金を渡してその日はまっすぐ家に帰ったのだった。

「ただいま」

「お帰りなさいマスター。顔色がよくなってますよ。」

「まあな。ジェル。明日から俺また学校いこうかな。」

「どうしてですか？」

「このままじゃ父さんや母さんに顔向けできないじゃん。」

「それは良い心がけです。私は反対しません。」

快く納得してくれたジェルに俺はまた泣いた。俺って本当に弱いなあと思っただった。

第2話 22個目のジェルシード? (後書き)

作「それにしても災難だったな。お前」

直「そうだよ。なんで俺だけこんな運命なんだろうな・・・」

ジェ「それは作者が意図的にやっている以外ないと思いますよ? マスター」

直「そうなのか? 作者・・・もう少しは改善してくれ、俺の人生」
作「無理です。」

直「即当!? 何で!?!」

作「だってそのほうが面白いからですね。」

ジェ「ああ。その意見なら私も賛成します。」

直「ジェルまで!?! どうしてだ・・・」

作「それは・・・」

ジェ「この物語のタイトルが・・・」

作「& amp; ジェ」とある男の不幸な事故だから (笑) 「
直「・・・」

直「・・・」

作「まあ話が進めば考えてもいいですけど・・・」

直「ホントか!?!」

ジェ「ええ。話が進めばですけど・・・」

直「そうか・・・なら俺頑張るよ!」

作「(バカでよかった。) そうですね。じゃあ次回でお会いしましょう。」

直「俺の活躍を楽しみに!!」

第3話 帰ったきた学校。(前書き)

直「ククク。今日から学校・・・ワクワクするな!!」

ジェ「どうしてですか？」

直「それは・・・友達がいるから？」

ジェ「あれ？マスターって友達いないんじゃないですか？げんにいじめられてたし・・・」

直「う、うるさい！と、とりあえず友達一人ぐらい作ってやる!!」

ジェ「それじゃあ頑張ってください」

第3話 帰ったきた学校。

翌朝。

聖祥小学校の制服に身を包み学校へ向かった。

教室の前に行くといく何人かの生徒は来ているようだ。

俺は意を決して1年前までしていたいつものように学校に入った。

「っはははは。ようみんな俺は一年ぶりに帰ってきた!!!!!!」

入った瞬間沈黙。

多分俺のことなんて忘れていたのだろう。

だがしかし、これから何があるかと俺は学校に行くとしたのだ。

「あれ〜どうしたの? みんな反応薄いぜ。ほら1年前見たいにつかかってこいよ。」

「.....」

「さあ今日から俺の新たな一日が始まるぜ。今日から俺が主人公だ!!!!!!」

思いつきりぶっちゃけます。これ相当はずいけどやるしかない。

チャイムがなり席についた。俺が来ていたことに驚いた教師もいたが、何よりクラス全体の雰囲気重かった。

幸いにもクラスにはなのはと転生者2人は休みでラッキーと思ったが油断したら原作キャラとイレギュラーに殺される。

あまり近づかないようにしよう。うんそうしよう。

「弁当ってやっぱり屋上が一番だよな」

『全く誰に向かって言っているんですか？』

『ここにいる全生徒にだよ』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

一人で弁当を食っていると一人の女子が俺の元にやってきた。この
もしかて・・・・・・・・俺に気があるのか？

「何でまた登校してきたのよ。気持ち悪いから喋らないでくれる？」

「これはこれは俺がいたとき学年2位だったアリサさんどうしたの
？」

「それがむかつくのよ!!」

どうやら怒っているらしい。まっ俺の怒りに比べたらたいしたこと
ないだろうけど。

「それで？ なにか用？ 自称学年1位さん？」

「あんたねえ。」

「それなら今度のテストでかけようよ。今度のテストで俺があんた
に負ければ俺は学校に来ない。もう。しかし、俺が勝てば、あんた
は俺と付き合う。結婚を前提にして・・・・・・・・どうだ？」

「そんなの乗るわけないでしょう!!!」

うーんあとひとおしだな。あの杉崎君に出来て俺にできないわけないからな。美少女ハーレム。

「負けるのが怖いのか？それでもあの家のお嬢様なんだな。負け犬家か。ははははくくく」

どうやら怒りが頂点に達したらしい。かなり来ているようだ

「なら勝負よ。私が勝ったらあんたは出ていく。私が負けたらあんたの言うこと何でも聞いてあげるわ。」

「ちよっ！アリサちゃん。いいのそんなこと言って!!!!」

「大丈夫よすずか。あたしが負けるわけないじゃない。」

そういつて食い下がった。テストは来月。それまでにテスト範囲を勉強だ!!

こうして俺はアリサ。（美少女）を手に入れる為にもう勉強が始まったのだった。

この勝負は瞬く間に学校中に広がった。アリサを勝たせようとするために妨害工作に走ったモノもいたが、アリサがそれを阻止。

どうやら真剣に勝ちたいようだ。妨害はできなくなり、それからみんな見守った。

そして結果当日。みんなが期待している中、発表された結果は。．．．

まず5位 田中 雄平。（転生者） 95点

3位千堂守（転生者） 97点

そして1位2位同時に発表された。結果は・・・

[illegible]

「まず点数からいう。一位100点 2位 99点だ。これは誇つても良い点数だ。」

そして発表。

さて結果はどうなる・・・・・・

[illegible]

•

.....

[illegible]

.....

•

.....

発表

1位 不動 直樹 100点

2位 アリサ・バンクス 99点

その差
一点差。

あまりの嬉しさに叫んだ

「いよっしやあああああ——!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「そんな」

「嘘だろ・・・・・・・・・・」

ふと後ろを見るとみんなして泣いていた。・・・・・・・・
これ俺が悪役じゃねえ？

「アリサちゃん・・・・・・・・・・」

そう叫んだのは月村さんだ。さすが親友思いなだけある。

「約束だ。」

俺はこの場の空気をぶちこわす発言をして、来週の土曜日デートに誘った。

それを洩々承諾し、この場はお開きになった。

家に帰ると爆睡した。はつきり言って1日3時間は子供ににが重い。
そういうわけあって睡魔に襲われたのだった。

第3話 帰ったきた学校。(後書き)

ジェ「・・・何かマスターがいじめられていた理由・・・わかる気がします・・・」

直「どうしてだ!？」

ジェ「・・・気づいてないんですか? マスター?」

直「・・・ん?」

ジェ「自覚ないんですか・・・。(流石は私のマスター。予想以上の馬鹿でした。)」

直「おい! 今馬鹿って思わなかったか?」

ジェ「いえいえ。ソナコトアリマセンヨ?」

直「そうか。ならいいんだが」

ジェ「それにしても作者遅いですね。」

直「あああいつなら先に帰った。なんでもやらなきゃいけないことが山積みらしいから。」

ジェ「どうせ、マスターのせいなんでしょうけどね。」

直「それより、もうそろそろお開きだ。残念だが今日はここまで。」

ジェ「では次回お会いしましょう!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1359z/>

とある男の不幸な事故

2011年12月7日00時46分発行